

## イギリスへ渡った茶 (2)

富山 八十八 (とみやま やそや)  
元ブルックボンドハウス総支配人

### ヨーロッパ人の茶に関する情報

ヨーロッパ人の茶に関する情報で最初のものが1559年にヴェネツィアのバイタ・ラムジオ編纂の『航海と旅行』と題した旅行記全6巻の中で触れているのが興味深い。彼はヴェネツィア共和国政府の重要事項を決定する「10人委員会」の書記官であり、当時ヴェネツィア政府がいかに海外情報に注意を払っていたかがわかる。

これはまだヨーロッパ人がアジアへ進出する以前のことで、この全集は航海者や旅行者からの情報を集めたものである。

この中で茶についてはその薬効を述べている。茶は大黃と別の植物だが、その煮汁は熱、頭痛、胃痛、関節炎、痛風に利く。

\* 大黃ダイオウは中国原産の漢方薬で健胃、下剤の薬として知られていた。

17世紀になって宣教師たちが実際に中国や日本へ来て茶に触れて報告している。それは次のようなものである。

(1) **茶の薬効**：ラムジオと同じく茶の薬効についていろいろと述べているが、特に高名な宣教師でマカオまで来たマテオ・リッチの報告で、アジアの茶を飲んでる人びとには通風患者はいないと述べたのが上層部の人たちに受けた。通風は非常に痛みが辛い。当時の食生活では一般の人が雇うことはないが贅沢な食事を飽食できる王侯貴族や上位聖職者など金持ちだけが雇ったから、万金を積んでも通風に効くとなれば茶を欲しがった。

(2) **接客の飲みもの**：中国では訪問すると茶が出されることを述べている。ヨーロッパでは接客の際の飲みものはビール、ワインなどアルコール飲料であったから驚きだった。

(3) **マナー**：食べ物皿や、器に容れられ、箸

で食べる。ヨーロッパではナイフだけを持っていて肉などを切り、手で掴んで食べ、汚れた指をナブキンで拭いていたのだから、アジアの洗練された食マナーに驚いた。

(4) **ヴァリニアーノの報告**：ヴァリニアーノはイエズス会東インド管区の総派遣巡察使として1580年来日して信長に安土城に招かれ、「天正少年使節団」をローマへ派遣した人だが日本人の茶について次のように述べている。

日本人は食事にはまったく手を触れず、礼儀正しく食事する。茶の湯がきわめて重んじられ、主人自らが茶を点じ客を歓待する。これに用いる器具、道具は珍重され、それに大金を投じる。

ヨーロッパ人にとっては茶をいれるのは召使の仕事だったから、織田信長という日本の最高権力者自らが客のために茶をいれるのは驚きだった。

ヨーロッパ人が茶に接した驚きは、単に茶という飲みものだけでなく、茶道具や器具、作法など優れた異文化を畏敬したものだだった。

### オランダのアジア貿易

オランダ東インド会社はインドネシア・ジャバ島の現地王国からジャカルタの土地を借り受け、商館や倉庫を建てオランダ東インド会社のアジアでの拠点とした。名前をオランダの地の先住民族の名前にちなんで「バタビア」と改め、オランダ東インド会社の総督とバタビア政庁が置かれた。バタビアは季節風の交差する地点でもあり、当時の海上交通の点からも最適な地であった。

アジア諸国との交易はバタビアを扇の要として、それぞれの交易先の国へ直航し、その地で仕入れた物産を帰り荷としてバタビアへ戻って

くる。バタビアに集められた物産はまとめてオランダ行きの船に積んで運ばれた。

オランダ東インド会社の当初の交易品の目的はスパイス、中でも高級スパイスにあった。クローブ、ナツメグ、メイスなどは「香料諸島」と呼ばれたモルッカ諸島の特産である。オランダはこの諸島を独占した。

シナモンはスリランカの特産で、ポルトガルが独占していたが、オランダは現地のキャンデー王国と組んでポルトガルを追い出した。

スパイスの産地は東南アジアに多かったのがマレーシアのマラッカが中継基地として重要である。オランダは先にここを占拠していたポルトガルを追い出して商館を構えた。

アジア地域ではすでに中国、インド、日本、東南アジア諸国などが交易ネットワークを組んでいたが、そこへオランダが進出してきたのだ。

#### オランダへ渡った緑茶

1600年4月、北九州の豊後水道にオランダ船「デ・リーフデ」号が漂着した。

2年前の6月に東インドを目指してオランダを出港した5隻の船団が大西洋からマゼラン海峡を通過して太平洋に出るが、そのうちのたった1隻だけが日本に辿り着いたものだった。出港時110人いた乗組員は18人になっていた。

臼杵城主からの報告に大阪城にいた徳川家康は航海長のウイリアム・アダムスとヤン・ヨーステンを呼んで会い、日本への帰化を奨め2人は日本に残った。

アダムスはイギリス人で妻子を故国に残しオランダ船団の航海長として参加したものだ。

アダムスは旗本に取り立てられ250石の領地を三浦半島に貰い、家康から「三浦按針」の日本名を貰った。「按針」は中国語で水先案内人を意味する。家康は積荷の大砲、砲弾などすべてを5万両で買い上げたので乗組員全員で分けた。

この大砲はヤン・ヨーステンらによって関ヶ原の戦や大阪城攻略戦で活躍した。ヤン・ヨーステンも屋敷を与えられ、その屋敷跡から「八重洲」の名前が生まれた。

家康はヨーロッパとの交易を望んでおり、三浦按針は家康の外交顧問としてアドバスした。

リーフデ号の船長らはオランダへ帰国のために中国船でオランダ東インド会社の商館のあるマレーシアへ向う。船長は家康の交易を希望する手紙を託されていた。

手紙を見たオランダ東会社は早速1609年にヨーロッパから来た会社船2隻を平戸へ派遣した。彼らは家康あての国書と贈り物をもってきた。

2隻は1610年にオランダへ戻るが、持ち帰った日本の物産の中に茶があった。また1607年にマカオへ来たオランダ船が中国緑茶を持ち帰ったとの説もある。両方の緑茶はいったんバタビアへ送られ、そこからオランダ向けの船に乗せられたと考えられる。いずれにしてもアジアの緑茶がまずオランダへ渡った。

#### アジアでのオランダとイギリスの通商競争

リーフデ号と三浦按針たちのことはオランダ、イギリスでも知られていたため、イギリス東インド会社は同国人である三浦按針を通じて日本との交易を目指し船を派遣した。按針の方からも交易地は平戸よりも江戸に近い浦賀の方がよいなどとアドバイスの手紙を送るが、船と行き違いになってイギリス船は平戸に入港して商館を開いしまった。

按針の尽力にもかかわらずイギリスは日本での交易でオランダの後塵を拝することになる。

日本との交易は赤字続きでイギリスは10年後に日本から撤退した。

香料諸島ではオランダが独占的地位を築きつつあった。

1623年2月、香料諸島のアンボイナ島でイギリスがオランダ要塞を攻撃するとの密告でイギリス商館のイギリス人10人、日本人10人、ポルトガル人1名がオランダ側に逮捕、死刑に処せられる「アンボイナの虐殺」事件が起きた。イギリスの世論は沸騰したが両国は戦争にいたらなかった。この後イギリスはジャワ島の西端バンタムに拠点をもちただけで東南アジアから撤退した。

バタビアのオランダ東インド会社のアジア各国との交易利益の半分近くは日本との交易で稼いでいた。中国の生糸、絹織物、綿織物を日本へ持ち込み、日本でえた金銀銅を中国へ運んで買いつけた生糸、絹織物などを次に本国へ運

ぶ。

1639年、徳川幕府は「鎖国令」を発するが中国とオランダの2国との交易は長崎に限定して許した。1641年、オランダ人を長崎の出島に閉じこめて日本との貿易を許可した。しかしこれは他のヨーロッパの諸国からすればオランダの日本貿易独占である。

### まずオランダで飲まれた茶

茶はアムステルダムのおークションに1651 - 52年に登場している。茶には「チアア」と「日本茶」の2種類があった。

コーヒーは10年遅れて1661 - 82年のオークションに登場している。

茶は高価だったし、ティーカップやティーポットはもっと高価だった。

1637年に富裕な商人が来客に茶を振る舞っている。

東インド会社の重役会はバタビアに日本と中国の茶壺を送るよう指令を出した。

1666年になると茶の価格はいくぶん下がったものの依然として途方もない価格で、少数の金持ちしか味わうことができなかった。

この頃から1680年にかけて喫茶が広まっていった。ヨーロッパ各地で茶は有益か有害かと賛否が分かれ、論戦が繰り広げられた。

1685年にオランダ東インド会社の重役会はバタビア総督に次のように指令している。

2万ポンド(約9トン)の優れた新鮮な茶をわれわれの言う通りに包装すること。

すでに述べたように茶は年を経ると品質が低下する。品質の悪い茶はいい値で売れないからだ。

オランダ東インド会社のバタビアからオランダ本国へ送られる品目が変わってきた。はじめ圧倒的に多かったコショウや香辛料に代わって絹や綿の製品が増えてきた。

### 1619～1700年の各品目のシェア推移

- ① コショウ・香辛料が74.0%から22.9%に減少。
- ② 砂糖は6.4%から0.2%に減少。
- ③ 絹織物・絹糸・綿糸が16.2%から54.7%に増加している。

茶とコーヒーは17世紀末から出現し、18世紀に入って前半に急増し、後半にかけても増加

を続け会社の輸入額の20%強を占めるようになった。

### 茶・コーヒー輸入額

年度	1698-1700	1738-40	1778-80(年)
全輸入の%	4.10%	24.94%	22.92%
金額	862	5,785	6,449
前年比	100	650	111

金額単位は1000グルデン

\* 科野孝蔵『オランダ東インド会社の歴史』同文館出版。

1988年。P. 86～117

これらの商品の販売額と仕入額との差額、すなわち荒利益は仕入原価の2.2～3.5倍になっている。しかし当時は海上保険はついておらず、難破や海賊行為などの危険が常にあったから、必ずしも充分な利益とはいえなかったようだ。

茶はオランダの富裕市民層から飲み始められた。17世紀の後半にはファッショナブルな風習として広まって行った。

富裕な家では特別のティールームをしつらえるところもあった。女性たちはピアホールに集ってティークラブをつくったりした。茶会が流行した。

当時のオランダでのお茶会の様子については1701年にアムステルダムで上演された風刺劇『茶に夢中になった貴婦人たち』からうかがうことができる。

女主人が取り出す茶箱は中国製の磁器か銀製である。銀製品は最高価な素材だし磁器はまだヨーロッパにはない。カップは中国製の小型のもので取っ手はついていない。

砂糖は塊のものを割って入れる。ミルクは入れない。

茶はカップから受け皿に移してクンクンと鼻を鳴らして香りを嗅ぎ、音を立てて啜る。

お茶の後にレーズンを添えたブランデーが出され砂糖を入れて啜る。同時に出されたパイプでタバコを吸う。

砂糖はオランダ東インド会社が輸入したもので高価だった。タバコはこの頃アメリカからもたらされたもので、パイプといっても女性用は腕の長い華奢なものだった。茶はオランダからフランス、ドイツなどヨーロッパ各国に再輸出された。1734年には約400kgの茶が輸入された。

1739年までには茶はオランダ東インド会社の輸入品のなかで最も重要なアイテムとなった。

オランダ東インド会社は茶の仕入れは直接中国へ赴くのではなく、ジャンク（中国帆船）がバタビアへ運んでくるものを買取った。

すでに華僑の勢力が強かったジャワでオランダ東インド会社はコーヒー栽培などの殖産事業を始めるのに彼らの財力が必要で、華僑を刺激したくなかったからだ。

ジャワでのコーヒー栽培は成功し、1712年に初めて販売された。

1710年後はヨーロッパでの緑茶需要が大きくなり、オランダはバタビアで中国茶を買いつけるほか、レバント地方（現シリア、レバノン、ヨルダン）へ来る中国船からも買いつけた。

この両方でオランダ東インド会社が買いつけた茶の約8割を占め、直接中国で買いつけたものは13%に過ぎなかった。この点がイギリスなどとは異なった特徴だった。

#### オランダ東インド会社の終焉

オランダ東インド会社はジャワの現地の王国の内紛に巻き込まれ、会社の業績は半分以下に

悪化した。現地王国の内紛にオランダ軍を派遣して制圧してゆく。

ヨーロッパでは1651年にイギリスが「航海条例」を発して、イギリス本土への物資輸送はイギリス船か輸出国の船舶に限るとした。これは圧倒的に優勢なオランダの海運を排除するものだった。両国の交渉は決裂し1652年の第1回イギリス・オランダ戦争から3度にわたる戦争となる。1672年にはルイ14世のフランス軍が侵入するなどオランダは国力を消耗していく。

1633年にチューリップ球根の投機によって世界初のバブルといわれる「チューリップ・バブル」を起こしたオランダの繁栄も、18世紀にはかげりが見えてきた。

オランダ東インド会社はジャワでの騒乱が1772年に収まりコーヒーやサトウキビの生産も順調に増加した。しかしイギリス海軍に本国の港を封鎖され、バタビアには農産物が滞貨し、本国からの送金は届かなかった。会社の損失は累積し連邦議会の穴埋めも限界となった。

1795年に本国はナポレオン軍に占領される。

そして1798年にはオランダ東インド会社はその197年の歴史を閉じた。

